



経鶯会新会長のごあいさつ

田村 隆 (1977年経・経)

この度、経鶯会会長に就任いたしました田村です。経鶯会では、これまで財務を担当してまいりました。以下に当会のこれからの運営等につき、いくつかご説明、ご報告を申し上げます。

- 皆様のおかげで、大学への寄付金額も550万円を越しております。皆様に心より御礼申し上げます。来年には、経鶯会のプレートがホールに飾られます。
また、毎年10万円を5名の成績優秀な学生に送る研究奨励金も、今年度も無事に実施することができ、大学のみならず、経済学部からも大変感謝されております。2013年の100周年には10人分100万円の研究奨励金を寄付しました。
- 本多名誉顧問から、経鶯会は女性会員の参加が少なすぎる、とのご意見を頂戴し続けておりましたが、福田順子先輩(新副会長1968経経)に経鶯会女子部を立ち上げて頂き、現在女子学生をも含めた勉強会等を学生も含めて計画、実行中です。女性会員にも気軽に参加していただけるよう努力してまいります。
- 毎年2回発行しておりますエコノミアン誌は今号でVol.54となりました。この秋には当会創立30周年を迎えます。そこでエコノミアン誌のバックナンバーを経鶯会のソフィア会ブログサイトでいつでも皆さまがご覧になれるように伊達副会長が準備中です。
経鶯会の大切な財産であるエコノミアン誌は川野名誉顧問のところできっと印刷していただいております。川野さんには細かな編集作業を手伝っていただいたり、一時は支払い延期までお願いしたこともありました。
- 経鶯会の最大の功労者と私が思っております池田賢吾(1965経商)さんは、現在病氣療養中で今年の総会には出席していただけませんでしたが、来年はご出席いただけると思っております。池田さんの後を継いでいるのが三輪副会長兼総務委員長(1978経営)です。一番大変な裏方です。
財務は、桑原委員長(1955経経)から前嶋委員長(1983経営)に代わって頂きました。桑原公認会計士の独立にともない金融のプロの前嶋さんに来ていただきました。財務体質の改善に私も一緒に取り組んでいくつもりです。彼にはシリーズ物の勉強会をやって頂くよう数年前からお願いしてはいるのですが、現在まで実現しておりません。時機を見て勉強会を開催したいと思っております。
事業企画委員長は小國敏雄(1978経営)さんから植村保彦(1981経営)さんになり、若い植村さんのエネルギー的な行動力に期待しております。
最後に、組織委員会は総務と同様変更なしの西島敏夫委員長(1979経営)と大武宏至副委員長(1978経営)で担当して頂きます。
- 総合的なフォローを戸川清副会長(1971経経)と流通業界のスター角井亮一副会長(1990経経)にお願いしております。角井さんは最近ではTVでも観ることができます。「田村を助ける」と言って下さった清先輩、本当に心強くありがたいです。
最後に伊達万壽夫副委員長(1977経営)、パロンゼミから一緒です。嫌な仕事をすべて伊達さんに押し付けてやってきました。今後もこれは変わりません。

経鶯会は、皆様もよくご存じのとおりボランティア団体です。皆様からの会費、研究奨励金への寄付等で運営されております。会費の集まりが悪く苦慮しているのが現状です。会員の皆様には今まで以上のご協力をお願いいたします。



2017年度「経鶯会研究奨励金及び経済学部・経鶯会奨学金授与式」
最前列中央：田村会長、左へ 青木学部長、福田副会長

この国の未来と IT のブラックボックス化

植村保彦 (1981 年 経・営)



昨年、「この国の未来と女性の活躍」について、寄稿させていただきました。今回は、IT（情報技術）関連の話題について私見を述べさせていただきます。

筆者（私）は 1980 年代に伸び盛りの電気通信業界で社会人としての道を歩み始め、その後、21 世紀に差し掛かる頃から、IT 産業に携わり始め、約 20 年が経ちました。IT は当初、パソコンを中心に作業を簡便化、効率化する道具として認識され、利用することが一般的でした。そして、ムーアの法則に後押しされ、IT 産業は瞬く間に成長し、グラハム・ベルの発明と結びつき、インターネットが登場しました。

このインターネットの登場により、通信手段が変化しただけでなく、散在している情報と情報、情報と人が結びつきました。今では、ゲームやサービスなどのアプリとも繋がり、さらに物にもつながる時代が到来しました。これまでは物理的な形状をとっていたお金（貨幣制度）は情報としてデジタルに捉えられ、今日話題の仮想通貨が誕生します。

昭和世代の誰もがワクワクして読んだ、手塚治虫先生の描いた世界が実現したかに見えます。かつてなく、物理的距離や時間の制約を受けず、様々な情報、知識にアクセスできるようになったことで、世界中のあらゆる地域の人々に学習機会が広がる一方で、利用の仕方次第で、人々に脅威を与える情報を誰もが簡単に手に入れられるようになりました。また、ネット上の情報は、事実の検証、確認を伴ったものだけでなく、無責任な書き込みや誹謗中傷も存在しており、その確からしさを検証する術を多くの人が持ちあわせていません。情報操作によっては人々の感情操作も起こり得ます。

さらに、便利なインターネットも、国家による情報統制によって、あるいはダークウェブのように特殊なツールを用いないと辿り着けない領域に、分断されたネットワークになりつつあり、誰もが、何処でもつながる「インターネット」ではなくなってきました。

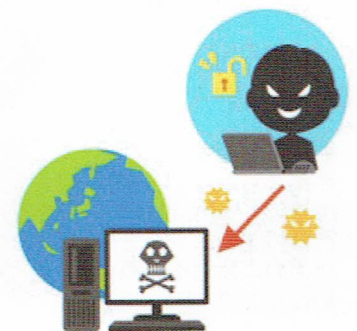
近年、ビッグデータ、AI、IoT といった用語がニュースに登場しない日はないほどです。IT 業界でインターネット、セキュリティなどに関わっている筆者ですが、物がネットと結びつくことによる IoT のメリットや可能性を認識しつつ、同時に、これらのシステム、機器のコントロールが適切に行われず、あるいは搾取されうる可能性を考えると、心穏やかにいられないものがあります。

脚光を浴びている AI、ディープラーニングは、従来人間でないとできなかった特徴量を学習し判断できるようになることで、知的作業が入る業務も置き換えができ、人間の仕事が無くなるなど議論が盛り上がっています。

メリットも多いことから、この流れは一層進んでいくと思われませんが、今の AI（人工知能）には、バイズ統計など、これまでの人工知能研究のように論理の積上げで考えられたものとは異なるアプローチが使われています。それにより入力と出力、原因と結果の因果関係が分からないブラックボックス化が進むのではないかという懸念も残ります。

世界の情報は言葉と図・映像等で形成されていますが、人間が作った情報と AI が作る情報がどのように分類できるか、言葉で綴られた情報が原型をとどめているかも検証が必要になりうること、そして情報の確からしさを確かめる方法がどれだけあるのか。

それでも、人間の記憶のあいまいさを考えると、蓄積されたデータ、情報に依存せずにはいられません。我々にできることは、情報をむやみに鵜呑みにするのではなく、知りえる情報に影響されうる自分を認識し、知りえることからの限界も感じながら、情報を吟味し、謙虚に考える努力を続け、



ブラックボックスを読み解き、次世代に繋げていくことのように思えます。

この先、何千年、何万年かけて解決しなければならない課題の前に、超えるべきハードルは数多く生じるでしょうが、かけがえのない地球とそこに存在する生命の代表として、そして八百万の神々の国に住む日本人として、多様性を大切にしながら、未来に繋げていく知恵と努力が一人ひとりに求められているのではないのでしょうか。ITが人類に与える光と影もその課題の一つで、我々は、より一層考えなければならなくなりました。

(経鸞会 事業企画委員長、ブロードメディア・テクノロジーズ株式会社 取締役副社長)

ロイターで働く日々

我謝京子 (1987年 外語・イスパニア)

ニューヨークに来てロイターで働く日々がこの4月で17年経過した。上智を卒業し、14年勤めたテレビ東京と合わせて気がつけば、伝える仕事に30年以上関わっている。その上、ドキュメンタリー映画もニューヨークに来てから3作出来た。人生100年、そのど真ん中で、これまでを振り返っても、これからを見据えても、つくづく「伝えること」が体に合っているんだと感じる。それも私の場合は、「事実」を伝えることが合っている。

実はこの根っこは、すでに小学生の頃からあったらしい。母はよく言っていた。「京子の作文は、事実の積み重ねで、自分の思いや感情が描かれていない。」と。不思議なものだ。それから何十年も経った今、伝える仕事を続けてきて、つくづく最近感じることは、「事実」と「真実」の違いだ。

「真実」とは、曖昧だ。なぜなら「真実」は、いかに同じ現場に居合わせても、それぞれの人のこれまでの人生や体験によって全く異なるからだ。黒沢明監督の「羅生門」はこの「真実」の曖昧さを実によく描いている。同じ現場で起こったことを、それぞれの立場から全く異なる「真実」を登場人物がそれぞれ語るのだ。

一方で、「事実」は不変だ。だから様々な大学の学生がニューヨークにやってきて、ロイターを見学し、「真実」を伝えるジャーナリストになりたいと語る瞬間、私は戸惑ってしまう。どうやって人それぞれが見方によって違う「真実」を、ひとりの人間が、「これが真実です」としたり顔で伝えられるのか？それはその記者の独りよがりの「真実」ではないのかと思うからだ。例えば、学生5人が夕方6時にオフィスを訪ねて来て私が話しをする。ここにある「事実」は夕方6時に学生5人が私を訪ねて来たこと。しかしこの場でそれぞれの学生が受け取った「真実」は、その学生のこれまでの生き方や体験で全く違った「真実」を見ていると思うのだ。

だから、私自身は、ロイターで原稿を書く時でも、自主映画で長編ドキュメンタリーを編集する時でも「事実」を積み重ねていくことを常に心がけている。その「事実」の先に視聴者がそれぞれの「真実」を感じてくれたらいいと思うのだ。

丁寧に丁寧に「事実」を確認しながらと自分に言い聞かせて原稿を書き、作品を仕上げていく。もともとは大雑把で雑な気性だからこそ、上智を卒業して就職してからは、丁寧に確認ということの大切さを思い知らされた。そして30年経った今も、「丁寧に丁寧に確認確認」と自分に、そして私を訪ねてくる学生達にも言い聞かせて毎日仕事を続けている。

(ロイター記者、アンカー&シニア プロデューサー、ファンテル (映画制作会社) 社長)



元気いっぱいの「女子部会」

福田順子 (1968年 経・経)

2016年度の経鷲会総会で承認されて経鷲会に女子部会が誕生して2年目を迎えます。昔は、経済学部に入学者の女性が少なかったのですが、近年は在籍学生の約4割が女子学生に増えているそうです。経済や経営に関心の高い女性が増えることは、日本経済にとってもプラスとなる可能性を秘めていると、密かに思っています。

準備段階を経て、実際に活動をスタートさせたのは、2017年5月の第1回のミーティングからでした。ここでは、いくつかのテーマについて議論が活発に行われました。経鷲会の役員もご参加いただき、応援団の存在は心強く感じました。

◆ ASFでのパソコン解体体験イベントの実施

女子部会として最初に取り組んだのは、5月のASFでの「親子で楽しむパソコン解体体験」です。部会長の所属する大学やその近隣の市町村ですでに何十回の「パソコン解体」イベントを実施していましたので、その手順に従って、女子部会メンバーに加えて経鷲会役員、女子部会長所属の大学の学生、総勢10名が、当日、メインストリートのテントで子供たちの解体体験のお手伝いをしました。

経鷲会としてはもちろん、大学としても初めての体験イベントですので、どのくらいの参加者(親子)が集まるのか、予想もつきませんでした。ASFへの参加が約1万人とのことでしたので、その2~3%が参加してもらえればよいと考えていましたが、場所がよかったのか、テントがよかったのか、なんと11:00~15:00で、約15名の参加がありました。本来は、パソコンの材料であるレアメタルの抽出、3R (Reduce、Reuse、Recycle)の実践が目的なのですが、子供たちは、そんな難しい話よりもパソコンの中が見てみたい、壊す体験をしたい、といった単純な理由で好奇心での参加がホンネだったと思います。



それでも、レアメタルがいかに希少で有限かを示す資料を渡したり、解体後、材料別にダンボールに分別したり、といった環境教育も行って、子供たちの学びに少し役立ったと思います。ご自分の子供だけでなく、お孫さん連れというソフィアンもいらして、主催者も参加者も、有意義な半日を過ごしました。ノートパソコンは、リサイクル率68%といわれていますので、そのまま捨ててしまえば、材料は復活しません。そういう話も、解体しながら子供たちに話したりしました。

できればこの体験を千代田区内の小学校でも行い、2020年の東京オリンピック・パラリンピックのメダルの材料に使ってもらいたい、という希望もありました。委

員会に提案をしましたが、大人の事情でスムーズにはいかず、実現には至っていません。

今年のASFでも、このイベントを行います。ご自宅に眠っているパソコンがあれば、当日、是非、ご持参下さい。

◆ 勉強会の実施

当初より、女子部会の目的の一つが、卒業して学ぶ機会が減った女子卒業生に、情報提供や学びの場を提供しようというところがありました。少ないメンバーでいくつもの企画は実現が難しいので、実現可能性を考慮して準備を重ね、第1回の勉強会を、4月14日(土)に実施することにしました。

上智大学はグローバル大学ですので、グローバルに活躍されている女性、また、逆に地域で頑張っている女性を講師に迎え、年に1~2回、開催することとしました。在籍の学生や関係者はどなたでも出席できます。とくに、在学生とOB・OGとの交流の場としても活用していきたいと考えています。

第1回の勉強会の概要は以下の通りです。

テーマ：「福祉大国スウェーデンの光と陰～スウェーデンに暮らして～」

講師：トゥンマン武井典子先生（1970年からスウェーデン在住、ヨーテボリ大学名誉教授）

日時：4月14日（土） 13：00～14：30

会場：6号館 203 教室

参加費：無料

問合せ先：jfukuda1308@ybb.ne.jp 03-3688-3834（福田）

◆ その他の活動・計画

今や、女性は男性に比べて元気です。女子部会のミーティングでも、いろいろ活発なご意見が出ます。昨年から構想しているのが「ソフィアンズ浴衣」の企画です。上智大学には「浴衣デイ」があり、学生は浴衣で講義を受けたり、散歩をしたりする日が毎年用意されています。学生の発案だとのこと。

女子部会では、クールソフィアの一つとして、江戸小紋の染付けの「ソフィアンズ浴衣」の提案を行いました。同時に、和手ぬぐいで季節ごとのソフィアンズ和手ぬぐいも提案いたしました。経鶯会役員の支援を受けて、実現に向けて奔走中です。通信販売も視野に入れていきますので、卒業生も入手可能です。

女子部会は、企画を練ったり提案することが趣旨ですので、その製作や販売には実際には携わりませんが、在学生の起業につながれば、価値のある活動になると考えています。

よい企画がございましたら、是非、ご一報下さい。

女子部会員は、経済学部女子卒業生ならどなたでもメンバーになれます。2月に1回、定例の会議を開催して、情報交換、新企画、イベントなどについて和気藹々で話し合いを行っています。いまは未だ10名程度のメンバーですが、是非、多くの卒業生のご参加をお待ちしています。

（経鶯会副会長・女子部会長、城西国際大学教授）



エコノミアン編集雑記

ソフィアの鷲

最近、同窓会関連のお手伝いで、四ツ谷のキャンパスの6号館6階にあるソフィアンズ・クラブに度々足を運ぶようになりました。正門をくぐるたびに「真理の光（Lux Veritatis）」を目指してはばたく鷲をかたどった校章を仰ぎ見ると、たった4年間の学生生活の間に、急速に湧き上がった思想の格差によって大学と学生、学生と学生が激しくぶつかり合った混乱の時代をいつも思い出します。その後、社会に出たあと、果たして自分は「人を望ましい人間へと高める最上の叡智（SOPHIA）」を備えた人間にふさわしい人生を歩んできたのだろうか、などとふと思いながら、改めて鷲を見つめている今日この頃です。この号から、私の渋谷区立代々木中学の先輩であり三木ゼミの先輩でもある小泉さんから編集委員を引き継ぎ、2015年経営卒の益田広平さんとともにECONOMYANをお届けして参ります。幅広く、読者の皆様からもご寄稿いただければ幸いです。どうぞ宜しくお願い致します。

（原稿をお送りいただく場合は、tomtogawa@vistom-mkt.comの戸川清宛にお願いします。）

戸川 清（1971年経・経）



－年会費納入のお願い－

同封の「払込票」にて年会費3,000円の払込をお願い致します。あわせて、寄付金によるご支援・ご協力をお願い申し上げます。

編集委員としてガンバルぞ！

益田広平 (2015年 経・営)



今回より、本誌の編集を担当させていただくことになりました。本誌を通してコミュニケーションを活発にできればと考えています。

2月の雪が降った日、後輩がOB訪問にやって来ました。彼女に「学生時代にすべきことは何か」

と質問されました。毎年のように聞かれる質問ですが、実に難しい質問です。今回は、そんな質問に対する答になるかは不明ですが、私の上智大学での経験について書きたいと思います。

2010年の春、経済学部経営学科に入学しました。当時はベンチャー企業への就職や、自分で会社を立ち上げる学生が増えていた時期でしたので、漠然と、経営は“カッコいい”という気持ちから、経営学科を選びました。

高校時代はラグビー部に所属していたのですが、大学では「運動部には入らない」と決めて上智の門をくぐりました。入学後、各部、サークルが新入生歓迎を行う真田濠の土手？(ソフィア通り)の桜並木は本当に素晴らしく、印象に残っています。社会人になってからも毎年見に行っています。この桜を植えたのは、1959年に外国語学部英語学科4年生の佐竹章夫さん(空手部主将)だと伺いました。堀が殺風景だとの思いから、区役所に掛け合って植林をされたとのことで、上智の先輩には素敵なお方があるなあと改めて思いました。

(詳細は以下リンク

https://www.sophia.ac.jp/jpn/aboutsophia/sophia_spirit/itd24t0000000d7f-att/itd24t0000007mgo.pdf)

運動部には入部しないと決めていたにもかかわらず、新入生歓迎に参加し、女子マネージャーが綺麗だという理由で、男子ラグクロス部への入部を決めました。

また、「英語で海外の人と話せたらカッコいい」という理由から、留学をしたいと考えていました。そのため、奨学金で学費をまかない、朝は部活、日中は授業、夜はアルバイトという生活を4年間続けました。

部活ではなかなか試合に出るチャンスに恵まれ

ませんでした。同期から「3年生で留学するのなら、2年生で試合に出ないと留学のチャンスはない。お前はどうしたいんだ？」との言葉に奮起し、頭を使って考えながら練習するようになり、なんとか試合に出られるようになりました。2部リーグから1部リーグへの昇格に、少しは貢献できたのではないかと考えています。

リーグ戦が終わった頃、新しい主将から、留学に行かずに部活を続けてはどうかと言われました。ようやく試合にも出られるようになりチームにも必要と思ってもらえているのが嬉しくもありました。しかし、英語が喋れたらカッコいい、自分の知らない世界を見てみたい、との思いが勝り留学の道を選びました。最近、留学先でラグクロスを続ける後輩も増えているようで、自分の時代とは違い、いい経験をしていると思います。

私が選んだ留学先はテキサス大学オースティン校(The University of Texas at Austin)で、大学が立地している街は、“Keep Austin Weird”というスローガンが掲げられ、空港には地元の店の2号店を入れるなど、Small Businessを大切に作る姿勢を貫く街でした。3月には、街を1週間ジャックして、音楽、映画、インタラクティブの見本市を行うSXSW(サウスバイサウスウエスト)という祭りが開催されます。音楽部門ではPerfumeが参加するなど、日本での認知度も高くなってきています。インタラクティブ部門では、Twitterがヒットするきっかけになったと言われるイベントで、2017年にはロボット義足を開発した東大生チームが革新的な技術やサービスを表彰するアワードの学生部門で優勝したことで注目を集めました。新しかりうが、古かりうが、楽しいものは楽しいと受け入れる懐の深さのある街だと感じました。私は、東京ストームという会社が行った子供と親がお手伝いを通してコミュニケーションできるアプリの広報を担当しました。そんな街で、時には授業の課題に追われ、時には寮の友人と地元の酒を酌み交わして徹夜をしたのも今では楽しい思い出です。

帰国後は部活に復帰しましたが、なかなか勝つことができずチームの雰囲気は微妙な感じでした。同期が大変な思いをしていた間、自分は好きなことをしていたという負い目もあってチームの運営にどこまで口を出すべきか悩みました。結局、自分の気持ちも整理できないまま、チームはほとんど勝つこともなく、2部に降格してシーズンは終了しました。

後輩の質問に対する答ですが、私は学生時代にすべきことをして来たといえるかどうか、正直自信がありません。振り返ってみて、やってきたことについて結果良しという思いはありますが、他の選択肢を選んだら、別の道もあったかもしれませんし、絶対的な正解はないように思います。しかし、就活にしろ、学生生活にしろ、何かを決めるのは自分です。自分の目を見て、自分の意志で決断することです。自分の意志で決断することで、自己責任という考え

方になります。幸い、上智大学は様々な経験を可能にしてくれる機会にあふれていますので、そうした機会を逃さないことが重要です。それが答です。

本誌を通じ多くの方とコミュニケーションをとりながら、これからの自身の生き方のヒントを得たいと思います。また、皆様も、本誌から何かのきっかけを見つけてもらえるツールになればと願っております。

(国際石油開発帝石株式会社勤務)

経鷺会の先輩方へお礼のごあいさつ

光本恵理 (経済学部経営学科 3年)

経鷺会研究奨励金および経鷺会奨学金の受給者として3年連続で推薦して頂きましたことはこの上ない光栄と存じます。心から感謝致しております。大学1、2年時は日本と中国の学生が1カ月を共に過ごし、議論を行う、日中学生会議の課外活動を評価して頂きました。そして、今年度は学業成績を評価して頂くことができ、改めて恵まれた学生生活を振り返る機会となりました。

経営学科に入学した頃は不安ばかりでしたが、熱心な教授の方々、それを支えて下さる学部事務室の方々、素敵な先輩方に出会い、とても充実した大学生活を送ることができています。今年度からはゼミの活動もはじまり、入学前から興味をもっていたブランド・マーケティングについての研究を行っています。具体的には、テレビドラマの中で商品が登場することで、そのブランドのイメージがどのように変化するのかを研究しています。ゼミの活動では、通常の授業とは違い、カリキュラム通りに学ぶのではなく、自身が興味を持ったことを、教授からアドバイスを頂き、深く学べるのでとても楽しいです。

経営学科の勉強以外にも力を入れ取り組んでいます。近年は、大学主催の海外派遣プログラムやインターンシッププログラムも増えており、授業以外でも自身の興味を深める機会を多々頂いております。昨年の2月にはアフリカのベナンに足を運び、現地で国際協力について学んできました。初めて発展途上国の現状を目の当たりにし、日本人としてどのように国際社会に貢献してゆきたいかを考えることができました。更に、2・3年生の夏休みには、花王株式会社と三菱商事株式会社のインターンシッププログラムに参加させていただき、様々な仕事についての理解を深め、将来の自身の進路についても深く考えるきっかけとなりました。自身と向き合い、今後どのように社会に貢献したいかを考えることができました。このように、経営学科、海外派遣プログラム、インターンシッププログラムなど、多様な場所での学びがあったからこそ、充実した学生生活

を送ることができるのだと思っております。また、様々な活動の中での出会いが、色々なことに挑戦し、楽しく学んでいく勉学のモチベーションになっております。

そして、私の充実した学生生活は、奨学金を下さる多くの先輩方に支えられているのだと思い、感謝の気持ちでいっぱいです。大学入学後、自由に使える時間が増え、挑戦したいことは増える一方でしたが、やりたいことが沢山あればあるほど、それに割くお金と時間が必要になるという現実に気が付きました。時間もお金も有限なので、優先順位をつけ、何かを犠牲にしなければなりません。しかし、そのような中でも、奨学金を頂いていたからこそ、時間にもお金にも余裕が生まれ、やりたいと思ったことは全て挑戦することができました。本当にありがとうございます。そして、私も卒業後には私の学生生活を支えてくださった先輩方を見習い、経済学部に入學した後輩を支えられるようになりたいと思っております。

学生生活も残り1年ですが、経鷺会の先輩方、先生方を始めとし、私達学生が学ぶ環境を支えて下さる全ての方への感謝を忘れずに、今後も勉学や課外活動に励んでゆきます。また、自分の好きなことに好きなだけ時間を使える期間も最後になってしまうので、好奇心に従いやりたいと思う事には果敢に挑戦し、悔いのなく有意義な大学生活を締めくくれるようにしたいです。今回の奨学金は、来年度参加したいと考えている海外プログラムに使わせていただく予定です。残り1年間も様々なことに挑戦し、また一回り成長した姿で、経鷺会の先輩方にお会いできれば嬉しいです。



今年度の活動計画

三輪一夫 (1978年 経・経営)

スケジュール

- 5月11日(金) ●ミニ企画 美術館ナイトツアー (於国立近代美術館)
「生誕150年 横山大観展」(担当:三輪一夫)
- 5月27日(日) ●ASF パソコン解体体験 (於メンスト、担当:福田順子)
●ワインと料理のマリアージュ (於SJ ガーデン、担当:上原隆一)
- 6月中旬(予定) ●学部長他幹部の先生方との食事会 (担当:田村隆)
- 6月~7月 ●社会人のための歌舞伎鑑賞教室 (於国立劇場、担当:大武宏至)
- 7月21日(土) ●祇園祭宵山と鷹山御神体見学ツアー (担当:田村隆・三輪一夫)
- 8月下旬(予定) ●ミニ企画「上方落語を聞く会」(担当:三輪一夫)
- 9月中旬(予定) ●経鸞会ゴルフコンペ (3月から降雪順延) (担当:田村隆)
●ミニ企画 サッカー観戦 (於浦和スタジアム、担当:松本正一郎)
- 9月28日(金) ●狂言記念公演鑑賞会 (於国立能楽堂、担当:大武宏至)
- 11月17日(土) ●経鸞会創立30周年記念総会・講演会



今後の活動方針

ミニ企画は当初、役員相互のコミュニケーションのために始めたものです。それは、同窓とはいえ学生時代に知らない仲間と卒業後に親しくなるのはなかなか困難だったからです。一般的に同窓会活動は飲みコミュニケーションになりがちですが、アルコールが不得意の方もあり、何か違う手段で意思の疎通を図りたいと考えました。

皆さんが仕事で企業や顧客を訪問した場合、いきなり本題に入る方は少ないと思います。季節の会話や世間話で、あたかも落語のマクラのようにその場を少し暖めていませんか。雑談の中で普段のイメージとはまったく違う趣味や世界を持っていることを知って、その方のイメージがガラッと変わった経験をお持ちの方も多いでしょう。共通の趣味に話が弾んだこともあるに違いありません。

ただ、一人での趣味の探索には自ずと限界があります。簡単なのはあたかも昔の社寺を参拝した「講」のように、「先達」に道案内をしてもらうことでしょう。社会生活において普段の立ち居振る舞いや仕事のヒントは、以外にも趣味や見物を通して経験したシーンの中に見え隠れしているものです。それは、教科書やマニュアルの類いには書いてないことばかりです。

今夏、7月21日(土)に計画している祇園祭宵山と「鷹山」見学も、休み山復活の旗を振っている山田純司さんがたまたま経鸞会の会員であったことが始まりです。前号のエコノミアンの記事を書いて頂いたお礼にお囃子を聴きに行く気分です。ソフィアの“大きな鸞”と“小さな鷹”の縁で、大学と宵山とがつながりました。10年後都大路を巡行の際に「上智大学」の名前がテレビから流れたとしたら、それはなんと素晴らしいことでしょう。

この機会に、夢かもしれませんが、その一翼を担いたいものです。

よく、同窓会は固苦しくてつまらないという声が聞こえてきます。しかし、ウィークデーは上司や部下に気を遣い疲れ果てている方も多い中、近年、ゆるい集まりの重要性が増してきたとも言われています。創立して30年の経鸞会も「変わらないためには変わらなくてはならない」。言い古された言葉ですが規律正しさとゆるやかさが共存した、船にとっての母船のような存在であることが経鸞会のあるべき姿と思います。

皆様のご支援とご協力をお願い致します。



鷹山囃子方の演奏風景